

第二十七回 齋藤茂吉短歌文学賞

柏崎 驍一 『北窓集』

短歌研究社

選考委員

委員長 三枝昂之

委員 小池 光

永田和宏

馬場あき子

【贈呈式】

平成二十八年五月十五日(日)

(五十音順)

柏崎 驍二 『北窓集』

(自選)

風ありて雪のおもてをとぶ雪のさりざりと妻が林檎を剥けり

くわんざうもぎしぎしも梅雨に茂りつつみちのくはいまみちのくの息

おのづからわれを離れて霧となる息嘯おきその息のごとく詠みたし

流されて家なき人も弔ひに來りて旧の住所を書けり

逃れ得ぬ風土のありてこの川に戻りくる南部鼻曲がり鮭

日の当たたる枯草に一羽ゐる鳥の目立たぬ歌をわれは作らう

東北がこのままでもいい訳がないどつどどどどうどなにか吹き荒れよ

あきづゆとなる雨は降りアンテナにある山鳩のあたまちひさし

沖さ出^ででながれでつたべ、海山^{うみやま}のごどはしかだね、むがすもいまも

歌書きて五十年過ぐおそらくは私の外のかなにかのちから

● 選考委員による選評

詩のよろこびと人生の滋味

三枝 昂之

柏崎さんの表現力には定評があるが、今回の『北窓集』ではそれが静かな悲歌の中で、そしてそれと表裏一体の人生へのいとおしみの中で、よりよく發揮されていると感じた。

くわんざうもぎしぎしも梅雨に茂りつつみちのく
はいまみちのくの息

雨季の陸奥ならでの命の濃さは土地に根ざした者の把握と思わせ、それが震災詠の淡々と叙述して深い悲歌にも繋がっている。

流されて家なき人も弔ひに來りて旧の住所を
書けり

他にも全国高校生短歌大会を歌ったへ城跡を行きて三行の歌を書く「まねる」はいつも「まなぶ」のはじめははじめ生きるものへ温かい視線も少なくなき、身の文を守りながら修辭的にも行き届いた世界とその作歌姿勢に私は深く共感した。

齋藤茂吉短歌文学賞にまた豊かな成果が加わったことを心から喜びたい。

言葉の妙味、言葉の力

小池 光

今年の齋藤茂吉短歌文学賞は柏崎驍二氏の歌集『北窓集』に決まった。

平成二十二年から二十六年の歌を収める。この間に作者は七十歳の峠を迎えた。また東日本大震災があった。柏崎氏は現在盛岡市の在住だが、郷里は三陸である。災害は遠い世界の出来事ではありえなかった。

言葉それ自身に関心をもち、言葉そのもののおもしろさ、不思議さにアンテナを張り巡らせたものが目に付く。方言などもたくみに表記して、歌に取り入れている。

道に立つ老女が杖を指して言ふ「ほれ、うづぐす
山だ、雲ひとつもね」

ほら、うつくしい山だ。雲がひとつもない、の意である。味わいふかい日本語である。

氏の作品を愛読するもの一人として、いつまでも座右に置きたい一冊である。

控えめな生活者の視線

永田 和宏

柏崎氏の歌風はどちらかと言えば地味だが、一首一首に込められた手触りの懇ろさは現代歌人のなかで群を抜いている。歌壇の流行などにはいつさい目をくねることなく、日常の景をさりげなく切り取り、その些事に潜む発見をていねいに掘り起こしてゆく。そのため言葉への執しかたは人一倍強く、そこに氏の歌への愛情がそこはかとなく感じられるのである。

今回の歌集では、自らの生きてきた東北への思いが、殊に東日本大震災というコンテクストのなかで強い印象を残すが、災害の酷さ、被災の辛さを声高に言い募るのではなく、生活者の視点から控えめに表現されているところが柏崎氏の歌なのである。

復興は緩やかなれど緩やかでいいのだ萩も櫛も
いろいろく

は、多くの歌人の夥しい震災詠のなかでも白眉だろうし、
展示する「震災と詩歌」詩も歌も句のひとつにも
死者のものなし

の発見には、冷酷とも言える現実への視線に、首筋が震
撼させられることにもなるのである。

北窓集の静かなかがやき

馬場 あき子

北窓集はしみじみと読める歌集である。しかし内容は震災関連の歌を含めて、決して静かなものではない。歌の内容や心の動きは激しくても、言葉のつづきからの落着きにしっとりとした潤いがあり、そこに文体の個性がある。長年にわたってこの詩形を愛し、工夫してきた練達の言葉の力を感じさせる。

軽やかなものにはあらず羽搏はたきてのぼる雲雀はし
ばしばも沈む

熊のある山にて採りし竹の子の白きあはれのもの
を賜びたり

流されて家なき人も弔ひに來りて旧の住所を書けり
三陸の春もの若布をわれは食べ辛夷の花を鴨の食
ぶる日

受賞のことば

柏崎 驍二

教科書には短歌教材として茂吉の歌が載っている。「死に給ふ母」が中心であるが、私はその度に心打たれながら教材に向き合っていた。特に若い頃はその傾向が強かった。だが今、茂吉の一首を挙げなさいと言われたら『白き山』の次の歌にしたいと思う。

最上川逆白波さかしらなみのたつまでにふぶくゆふべとなりけるかも

「最上川逆白波」までが漢字で、以下はすべて平仮名である。私はこの詠み出しの漢字六字が気に入っている。極端に言えばこの歌はこの漢字六字だけで十分である。壁に掛けた絵の下に貼付してある題のようである。風景が実感として見える。それは私が東北の風土に暮らしてきたためかもしれない。

私の郷里は三陸海岸の吉浜村（現岩手県大船渡市）である。風の日逆波が入江に白く走っていた。海が荒れているかどうか、その日その日の関心事だった。「最上川逆白波」の歌は、東北に暮らす人の「息」のようなものである。この賞は私にはおこがましいものであるが、選考委員の方々に感謝しつつお受けしようと思う。ありがとうございました。



第27回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

柏崎 驍二 (かしわざき きょうじ)

歌人。

1941年(昭和16年)岩手県生まれ。

2016年(平成28年)4月15日ご逝去 享年74歳。

岩手大学学芸学部卒業。

大学在学中「コスモス短歌会」に入会。宮柗二の歌を学ぶ。

岩手県盛岡市で開催される全国高校生短歌大会の運営に長年携わる。

コスモス会員。元岩手県公立高校教諭(国語教諭)。

【主な著作等】

歌 集：昭和58年『読書少年』、平成元年『青北』、
平成17年『四十雀日記』、平成22年『百たびの雪』、
平成27年『北窓集』など。

著 書：平成25年『宮柗二の歌三六五首』
平成27年『短歌入門 うたを磨く』

受賞歴：平成23年短歌研究賞、詩歌文学館賞

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆
- 第二回 本林 勝夫
- 第三回 塚本 邦雄
- 第四回 前登 志夫
- 第五回 斎藤 芳史
- 第六回 近藤 芳美
- 第七回 小暮 政次
- 第八回 馬場 あき子
- 第九回 吉田 漱
- 第十回 佐佐木 幸綱
- 第十一回 伊藤 博
- 第十二回 森岡 貞香
- 第十三回 竹山 広
- 第十四回 藤岡 武雄
- 第十五回 清水 房雄
- 第十六回 小池 光
- 第十七回 三枝 昂之
- 第十八回 花山 多佳子
- 第十九回 永田 和宏
- 第二十回 河野 裕子
- 第二一回 伊藤 一彦
- 第二二回 品田 悦一
- 第二三回 篠 弘
- 第二四回 秋葉 四郎
- 第二五回 栗木 京子
- 第二六回 小島 ゆかり

- 『親和力』 砂子屋書房
- 『齋藤茂吉の研究—その生と表現—』 桜楓社
- 『黄金律』 花曜社
- 『鳥獣蟲魚』 小澤書店
- 『秋天瑠璃』 不識書院
- 『希求』 砂子屋書房
- 『暫紅新集』 短歌新聞社
- 『飛種』 短歌研究社
- 『白き山—全注釈—』 短歌新聞社
- 『吞牛』 本阿弥書店
- 『萬葉集釋注』 集英社
- 『夏至』 砂子屋書房
- 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房
- 『書簡にみる齋藤茂吉』 短歌新聞社
- 『獨孤意尚吟』 不識書院
- 『滴滴集』 短歌研究社
- 『昭和短歌の精神史』 本阿弥書店
- 『木香薔薇』 砂子屋書房
- 『後の日々』 角川書店
- 『母系』 青磁社
- 『月の夜声』 本阿弥書店
- 『齋藤茂吉—あかあかと一本の道とほりたり—』 ミネルヴァ書房
- 『残すべき歌論—二十世紀の短歌論—』 角川書店
- 『茂吉幻の歌集—萬軍—』 戦争と齋藤茂吉— 岩波書店
- 『水仙の章』 砂子屋書房
- 『泥と青葉』 青磁社

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇—八五七〇

山形市松波二丁目八一— 山形県企画振興部県民文化課内

TEL・〇三三—六三〇—三〇六